ドッペルゲンガー

守水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドッペルゲンガー

【Ｎコード】
Ｎ７６８５Ｐ

【作者名】
守水

【あらすじ】
押さえ込まれていたもう一人の彼が、静かに復讐を画策する。それは誰も気付くことはなかった。ただ一人を除いては。

第一話

「雅浩！　あんたまた何やってんの！」
怒声と共に、雑誌の切り抜きが大量に散った。名を呼ばれた男子は、今まさに配ろうとしていたプリントの束で顔を半分隠し、目だけを見せている。
「ちえー、来るの早いってんだよ……。そういちいちヒステリックになるなっての。カルシウム取れよ」
「あんたに言われたくない！　何回言ったらわかんの？　いい加減やめろよ、こんなエロ本切って机にご丁寧に敷き詰めるの！」
「だってあいつなんも言わねえし。慣れてんだろ」
「んなわけあるか！　人よりちょっと喋んないからって、調子にのんじゃない！」
周りで会話を楽しんでいる生徒とは違う、強い視線を感じたのだろう。雅浩をにらむ女子が、怒りの表情を解いて教室の入り口に顔を向けた。棒の様につっ立っている男子が、そこにいた。
「あ……、久人君」
「京子さん、おはよう」
「あ、お、おはよう」
いつも通りに挨拶され、京子はしどろもどろな返事をしてしまった。久人はそれを気にするわけでもなく、自分の席へと歩いていく。
「あ、久人君ごめん！　雅浩がまた変なことやらかして。今片付けさせるから」
「は？　え、何俺が片付けんの？」
「当たり前でしょ！　ほら、さっさと拾って！　プリントはあたしが配るから」
久人の机に残っていた切り抜きを床に払うと、京子はずかずかと雅浩に近づきプリントをひったくった。雅浩の言い訳など聞く耳持たぬというように、プリントを数え、配り始めている。

「ったく……」
雅浩は仕方なく、久人の机の周りに落ちた、大量の切り抜きを手でかき集め始めた。当の久人は、席に座らずに雅浩を見下ろしている。
「……このやろ」
雅浩が何かをしでかし、京子に叱られ、後始末をやらされる。そういう時久人は、必ず雅浩を見ていた。もう顔を見ずともわかる。いつも申し訳なさそうな、哀れむような顔をしているのだ。怒った顔は見たことがない。それが、雅浩を余計いら立たせていた。

限界だった。
はた目には大丈夫に見えいているだろう。自分でもそう見せようとしている。でも、本当はもうぎりぎりだ。
さっきみたいな、目に見える嫌がらせのほうがましだった。今となってはそれに加え、こそこそと影で何かを言うようになった。他のクラスメイトには聞こえないよう、自分だけに聞こえるように。ある時は自分に見せ付けるように、みんなの前で自分のことをバカにするようなことを言う。みんなは気付いていない。それはただの大きな独り言に聞こえているから。
そういう嫌なことは、全部心にとどめて消化してきた。だけど、消し去りきれなかった分があったんだろう。どんどんそれが溜まって、溢れそうになっている。表面張力で膨らんだ水みたいに、パンパンに膨れ上がった風船みたいに。
そして今日、その限界を超えたのに気付いた。何もあの切り抜きの敷詰めが、今までで一番ショックを受けたからってわけじゃない。何かの引き金になるのは、大抵ささいなことなんだから。
あふれ出た負の感情が、自分の体を操っているように感じる。すること全てが、意味はないとわかっている復讐のために動いているような感触。

この負の勢いは止まらない。静かに、確実に、仕返しの計画が練りあがっていく。人間、極端な感情でいっぱいになっているときは、気味の悪いほど頭が働くみたいだ。

「あ、見て！　あの人じゃない？　三年生で一番有名なのって」

――知ってる。ふと聞こえた女子の声に、久人は心の中で呟いた。ノリがいいとか、なんでもリーダー的存在になるとか、そういう意味で有名な人ではない。ぱっと見は暗い。でも人を惹きつける何かがあるんだろう、学年を問わず色々なことに関して、相談に乗ってくれる人らしい。

腕時計を見る。まだチャイムは鳴らない。あと二分ぐらいというところだ。

その時、久人は目の前に気配を感じた。見ると、男子生徒が立っている。なぜ人の前で止まるのだろうと一瞬不思議に思ったが、久人の寄りかかっている後ろには、窓があった。どうやら景色を見ているらしい。

「やるのか」

低い声が突然降ってきた。久人が驚いて顔を上げると、窓の外を見ているはずの目は、こちらを向いていた。起きたばかりのようなぼさぼさの髪を、首元で小さく結わえている。それなりに体格もよく、長身のその男子は、久人も何度か見たことのある、ついさっき女子が話していた三年生だった。

「やるんだな」

今の久人にとって、『やる』というのは仕返しのことに他ならなかった。もしかしたら違う意味で聞いていたのかもしれないが、焦った久人にそのことを考える余裕はなかった。

「……そうか、今日やるのか」

心臓が跳ね上がった。おそらく顔も、今の心情を隠せていないだろう。何も言えないまま、久人はただ目を見張っていた。

気付かないうちに、変化があった。目の前の三年生が、笑っていた。口角が小さく上がっただけの笑みだった。

三年生は外に目を戻すと、その目を伏せながら廊下を歩き始めた。一部始終を見ていたのだろうか、女子組が廊下の向かい側から小走りよって来た。
「久人君、なんか話したの？」
「い、いや……。ただ外見てただけみたい」
視界から消えるまで、久人は三年生の背中を見つめていた。

「……久人君」
「何ですか？」
放課後、教室に残り自主勉強をしていた久人に話しかけたのは、京子だった。
「今さらだけど、ごめんね、雅浩のこと。何回言っても懲りてないみたいで」
「いや、大丈夫です。もう慣れましたから」
嘘だ。今日やるんだ、仕返しを。もう自分では止められないところまで来てしまっている。
「あたし、もうちょっとガツンと言ってやったほうがいいのかな。これじゃあ一年中この調子だもんね」
「京子さん、僕は本当に大丈夫ですから。いつもかばってくれて、感謝してます」
自分がこれからしようとすることは、その感謝を踏みにじるかもしれない。
「かばうぐらいしかできなくてごめんね。あたしももうちょっとがんばってみるから」
「ありがとうございます。でも、無理とかはしないで下さい。僕なんてまだ軽いほうですよ。噂かもしれないけど、もっとひどいことされてる人がいるって聞いたんです」
「ああ、あたしもある。あれは女子同士だったかな。身体的な嫌がらせだとか。あーやだやだ、女子は陰険でやだねえ」

大げさに肩をすくめ、京子はカバンを取った。
「遅くまでご苦労だね、久人君。勉強も休みいれないとだめだぞ」
「そうですね。じゃあ」
「また明日ー。バイバイ」
足音が消えてから、久人は窓から校庭を見た。運動部は、まだ部活をしている。
「……今日は家に帰れないかもね」
夕日が、教室中を自身の色に染め始めた。

第二話

「おい……。誰かいるのか？」
廊下を見回していた久人を呼んだのは、おずおずとした雅浩の声だった。
「いるよ」
「っ！　その声……、久人か！？」
「当たり」
「おい、てめえっ……」
沈黙が言葉をかき消したようだった。
「なんだ……これ」
「僕は力がないからね。すまないけど、寝てる間にそうさせてもらった」
わずかな月明かりと電灯しか差し込まない、しかし完全な暗闇ではない教室で、久人は雅浩の横に立った。机を並べた上に、ガムテープで動きを封じられた雅浩の横に。
「楽しかった？　まあ、楽しくなけりゃやらないよね」
「なんのことだよ……」
「気付かないほど習慣になってたんだ。僕のことこそこそ言うのが、日記を書いたり風呂に入ったりするのと、おんなじくらい」
久人の目は、怒ってはいなかった。むしろ怒りさえも超えたのか、それはあまりにも静かだった。
「僕だってバカじゃないから、こんなことしてただで済むとは思ってない。今だって自覚してる。バカな事やってるって」
「じゃ、じゃあなんで」
「もう止められないんだよ。天井に向けて投げたボールが、空中で止まる？　でも、僕も悪いよ。誰にも相談しなかったんだから。でも元凶は変わらない。お前がいたから」
片手に持っていたハサミを、久人は目の前に掲げた。

「おま……」
「言葉で言うほうが心に傷を負いやすい。でもその言葉を考えるのは面倒だ。僕は自分の手で、仕返しがしたい。だからこうする」
振り上げられたハサミの先は、勢いよく机に突き刺さった。そのすぐ脇には、雅浩の頬があった。
「……どうしたんだい？　僕がそんなに怖い？　ただハサミを持っただけで。でもこれはお前が今までやったことの報いだ。僕がやらなくてもいずれは受ける報いを、僕が今早めただけだ。それぐらいわかってやってるんだと思ってたよ」
楽しい。威張っていたやつが、今はおびえている。そんな感情に染まりつつも、久人にはまだ冷静な心があった。その心で、もう自分は壊れてしまったんだと、諦めていた。
「どうする？　どこを最初に刺してほしい？」
再び掲げたハサミの取っ手を、久人は両手で掴んだ。雅浩は、ただその凶器を凝視するだけだった。
「……面倒だから、すぐ心臓刺しちゃおうか」
狂気から来た楽しさから、久人の口が不気味な弧をえがいた時だった。
「ひさ、と……くん？」
静かゆえに響いた、か細い声。殺人者になろうとしている男子ははゆっくりと、被害者になろうとしている男子は即座に教室のドアを見た。
「何……？　何やってるの？　ねえ、久人君だよね。それ、何？　そこにいるの、誰？」
「きょ、京子！　俺だ！」
嘘だとでも言いたげに、呆然の上に薄く笑みを貼り付けた京子の表情は、雅浩の裏返る寸前の声で、我に返ったようになった。
「まさひろ？　雅浩なの、そこにいるの。ねえ、久人君！　何……。どうして……」
「ごめん……京子さん。もう止められないんだ」

「やだ、やめて！　違うよ、久人君はそんなことする人じゃない！」
「ううん、そんなことない。京子さん、僕みたいな大人しくて、真面目そうで、そういう人間こそ、こういうことをする可能性を秘めてるんだよ。嫌なことも全部、背負ってしまうから。だから人に知られないで、溜まったものが静かに爆発する。そして……こうなるんだ」
久人の手に、力がこもった。
「久人君、お願いやめて！　あたし久人君がこんなことするの見たくない！　雅浩が殺されるのも見たくない！」
「……京子さん、雅浩のこと、かばうんだ」
振り向かずに放たれた声に、京子は久人の背を見つめた。
「……久人君、確かに、あたしは雅浩が嫌いだよ。久人君のことずっといじめてて。でも、死んでほしいなんて思ってない！　今に報いが来るって、雅浩にも言ってた。でも、それは死じゃないよ！」
久人の手から力が抜けていった。それを抑えようと再びこめるが、その手は震え始めていた。
「だめだよ久人君……こんな一時的な感情で、こんなことしちゃ。絶対後悔する。わかるでしょ？」
「……わかるさ……。でも……」
「お願い……久人君」
止めたい。でももうどうしようもない。自分さえコントロールできない自分がいやだ。自分が――
「終わらせないと」
そうすれば解放される。
頭の上まで勢いよく振り上がったハサミが、一瞬光った。
「久人君だめ！」
京子の叫びも虚しく、刃物は対象を突き刺した。
「久人……」
見開かれた雅浩の目には、体をくの字に折り曲げ、腹部を赤く染

めた久人が映った。彼の目から、久人はゆっくりと消えていった。
「あ……あ……ひさ、久人君！」
久人の横に、京子は膝をついた。
「なんで、なんで自分を……」
「……ぶんが……」
人に聞かせるようではなく、おのれにだけ聞かせるようなかすれた声が聞こえた。
「自分が……嫌だったから……。自分の感情さえ操れないなんて……そんな……自分が、嫌になって、嫌いになって……」
「そんな……」
大きく息を吐き、久人は続けた。
「行って……。雅浩を……」
「……うん」
よろめきながらも立ち上がり、京子は雅浩に張り付いたガムテープをはがし始めた。
「いで！」
「何よこんくらい。今まで久人君いじめてた報いだと思いなさい！」
手の甲をさすりながら、雅浩はゆるゆると立ち上がった。
「久人君、立てる？　肩貸すよ」
「僕は……いい……。ほら……、昇降口、閉まっちゃうから」
「よくないよ！　久人君を置いてなんか……」
「みーつけたー」
どこか調子の外れた女子の声が、教室の中に入ってきた。
「だ、誰だあれ」
「絵那……。高屋絵那？　な、なんでここに」
「えな？」
振り向いた京子の顔が驚きの色一色になっているのを見て、雅浩は入り口に立ちふさがる女生徒の名を繰り返した。
「陰湿ないじめにあってるって噂されてた子。顔だけは知ってたから……ひっ！」

立ち上がっていた京子が、短く鋭い悲鳴と共に一瞬大きく震えた。
「田野雅浩って、その人だよね？　なんでこんな夜に学校にいるのかなー？　まあ手間が省けていいや」
歩みを進めた絵那の制服は、朱に染まっていた。右手に、カッターが力強く握り締められている。一番色が濃いのは、その右手とカッターだった。
「何を……何したの、あなた。誰を……」
「いじめっ子をねー、やっつけたの。たくさん刺したの。ざくざくざくざく。面白いんだよ。刺すたびに声が出るの！　でもね、あんまり刺したから壊れちゃったの」
「まさか、こいつ……」
「殺したんだ。この子をいじめてたって子を。学校で。ついさっき」
口を覆った京子の両手は、がくがく震えていた。
「いじめっ子はねー、あたしがみーんなやっつけてあげるの。その人もいじめっ子でしょ？　あたしがやっつけてあげるから」
絵那は机のせいでジグザグに進むものの、雅浩を目指していた。ゆがんだ笑顔を貼り付けたまま。
「ふふ……。いじめっ子はみんな消えちまえ！」
叫びと共に絵那は突然カッターを逆手に持ち替え振り上げた。そしてあと数歩の距離を駆け、刃先を雅浩の胸に定め――
「ぐ、うっ」
髪の毛が雅浩の鼻先に触れた。彼はカッターではなく京子の小さな体当りで、半歩下がっただけだった。
「何ー？　あなた。あなたもいじめっ子だったの？」
絵那がカッターを引き抜くと、京子は膝をついて横に倒れた。雅浩もそれに続くように、腹を押さえうめき声を漏らし倒れた。
「まーいいか。雅浩っていじめっ子も死んじゃったみたいだし。他にも残ってないかなー、いじめっ子……」
暗闇に紛れ込んでいたためか、絵那は久人に気付いた様子もなく、すっと踵を返してふらふらと教室を後にした。

「いじめっ子ー、いないー？　ふふ……」
声が遠ざかると、床に伏していた三つのうち一つの体が、起き上がった。雅浩だ。彼の腹部には何の外傷もない。絵那を騙すため、一芝居うったのだ。
「京子……。おい、大丈夫……なわけねえよ、何言ってんだ俺！」
悔しげに叫ぶと、雅浩は京子を仰向けにした。彼女は人形のように力なく転がった。
「京……くっそあの女！」
京子の制服の半分以上が、絵那の右手と同じ色に染まっていた。雅浩は京子の口元に手をかざし、ほっと息を吐いた。息はまだあるようだ。
雅浩が後ろを見ると、そこには久人が倒れていた。同じく腹部を真っ赤に染めて。
「……っ、救急車呼ばないと」
立ち上がって携帯を取り出そうとしたまさにその時、まるで念が届いたように、サイレンの音が聞こえ始めた。

第三話

最初に目覚めたのは、聴覚だった。朝なんだろうか、すぐ近くで鳥の声が聞こえる。それより少し小さく、葉の触れ合う音。まぶたが温かい。入ってくる光の強さにすぐ慣れることができず、目を薄く開けたり閉じたりして、やっと目の前の景色を見ることができた。学校のによく似た蛍光灯。でも、天井はきれいだ。

首を左に向ける。薄いピンク色のカーテンが見えた。自分の寝ているベッドのものではなく、隣のもののようだった。そこまで見て、久人はここは病院なんだと気付いた。

右側が明るい。窓があるんだ。そう思って、今度は右に首を向けた。大きな窓が視界に入った瞬間、その下で何かが動いた。すぐ視線を下に落とす。久人の目が小さな驚きで丸くなった。

「……ひろ」

寝起きのせいか、声がうまく出ない。小さく咳払いしてから、もう一度声をかけた。

「雅浩？」

身じろぎしてから、雅浩がゆっくりと目を開けた。久人の声は小さかったので、そのおかげとは言いがたい。

「ねえ、雅浩。なんでここで寝てるの？」

「ん……ああ！？」

飛び起きた勢いが強すぎたらしく、雅浩は座っていた丸椅子と一緒に背中から大きく倒れた。ところどころぶつけたらしく、カタツムリ並みの遅さで、窓を支えに立ち上がった。

「ってえ～……。な、なんで俺お前んとこで寝てたんだ？　京子のほうに行ったはずじゃ……」

「ばっかじゃない？　あんた。大体あたしんとこに来た時点ですっごく眠そうだったし、こっちに来ようと思って結局寝ちゃったんじゃない。あんたのその記憶は夢ん中よ！」

「げっ、起きてたのかよ！」
見計らったようにカーテンを開けて、京子が姿を現した。この様子だと、京子はしばらく前に目を覚ましていたらしい。自分と同じようにベッドにいる京子を見て、久人は目を丸くした。
「京子さん……。え、どうして京子さんが」
「あ、そっか、久人君わかんないんだよね」
京子は一人で、久人が倒れた後の事を事細かに話した。その間、雅浩は椅子を二つのベッドの間の、足元近くまで持って行き、そこに座りながら時折肩やら背中やらをさすっていた。
「あの彼女が……。結局、どうなっちゃったんでしょうね、彼女。見つかったんでしょうか」
「見つかった」
突然割って入った低い声に、三人とも肩を震わせた。ほとんど音を立てない部屋のドアが閉められる。そのドアの前には、久人たちの学校の制服を着た、長身の男がいた。
「あ、あなたは……」
「もしかして、三年生の有名な」
「例の不思議三年生か？」
京子にそう聞いた雅浩は、逆に叱られてしまった。
「ちょっ、雅浩！　そういうこと本人の前で言うもんじゃないでしょ！」
「構わん。俺の名前を知らないやつはそう呼んでるらしいしな」
二人のやり取りが面白かったのか、その三年生は小さく笑い、三人の輪の中に入ってきた。
「テレビはつくか？」
「えーっと……、あ、これカード式だぜ。カード買わないと」
「大丈夫だ。買う暇などなかっただろうからな」
立ち上がろうとする雅浩を制して、三年生は棚の上のテレビにカードを差し込んだ。
「え、あ、ご、ごめんなさい！　カードなんて買っていただいて」

「このくらいなんともないさ。それより……あった」
手動でチャンネルを操作していた三年生の手が止まった。事件のニュースのようだ。女性キャスターが、黙々と事件内容を読み上げている。
『逮捕されたのは、この高校に通っていた女子学生です。彼女は同級生の女子生徒を、カッターで何度も刺し、殺害したのち……』
「これが彼女だ」
顔写真こそ公開されてはいないものの、その逮捕された女子生徒の行動は、昨日京子を刺した高屋絵那、その人のものだった。
「捕まった……んですか」
ぽつりとこぼした久人に、三年生は答えた。
「ああ。駆けつけた救急隊員と学校の警備員が、カッターを持って歩いてる高屋を見つけてな。隊員の一人に刺しかかろうとしたのを止めて、警備員が警察を呼んだんだ」
「な、なんでそんなこと知ってるんですか」
「見てたからさ」
雅浩の質問に、三年生はさらりと答えた。
『刺されたのは生徒三人です。最初に刺された入村澄子さんは、失血によるショックで死亡。その後に刺された高野京子さんと木村久人さんは重傷でしたが、現在は病院で意識を回復したようです』
「うわ、あたしの名前出てる。変な感じ～……」
「それじゃ、俺は失礼しよう。手土産も何も持ってないしな」
「あの！」
三人に背を向けた男子を止めたのは、久人の声だった。顔だけ久人に向けた彼に、久人は疑問だったことを聞いた。
「あなたは……わかってたんですか？　僕がやることを」
「あんなに思いつめた顔をしていればわかる。鬼気迫るものがあったからな」
「……なら、どうして止めなかったんですか？」
「人が決めたことには干渉しない。それが俺のルールだからだ。そ

いつがどんなことをしようとな」
　初めて久人がこの三年生に会ったときの、あの笑みを見せて、彼は部屋を出て行った。
「なーんか雰囲気が違うよなー、あの人……。あ、そうそう、救急の人来たときにさ、あの人たち『君が雅浩君だね』って言ってきたんだぜ。俺名前教えてねえのに」
「え、あんた通報してないんでしょ？」
「でも隊員の人は、通報して来た人は雅浩だって名乗ったって言ってたんだ」
「ドッペルゲンガーね」
「ちげーよ」
　二人の会話に、久人は小さく笑い声を漏らした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7685p/

ドッペルゲンガー

2010年12月28日09時40分発行